

宇曾利湖は真夏の太陽を浮かばせていた。湖の中は目の覚めるような青と、湧き上がる硫黄泉の黄色とで鮮烈な色彩を呈していた。

下北半島の夏は短いと聞いていたから、霊場恐山が三十度を超える暑さの中で眩しく彩られているとは予期せぬことであった。しかし、時折吹きつける風はどこかひんやりとしているし、この真夏日なのに蝉の声一つ聴こえず、しんと静まり返っている。

湖畔ではかざぐるまがカラカラと音を立てながら回り続けている。岸辺の砂の乾いた白と、かざぐるまの羽の極彩色とのコントラスト。眩しいほど鮮やかなのにどこか寂しいこの世ならぬような風景。しかしその中に私は、静かな安堵感のようなものを感じ取っていた。どこかで味わったようなこの気持ち……。

そう、あれは私が小学六年生のときだった。

私は父と祖母に連れられて、父方の故郷を初めて訪ねたのであった。

転勤族の家庭出身の両親の下で育ったものだから、私はお盆の行事やお墓参りもしたことがなく、家に神棚や仏壇があるわけでもなかったから、自分の祖先について想いを馳せることも身近に感じることもないまま過ごしてきた。だからこの旅では、自分の起源の地をしっかりと見てこようと心に決めていた。

向かったのは岩手県内陸の小さな町。そこに私の祖母の本家がある。祖先は南部藩の武士であったが三百年程前にこの地へ移住、庄屋となり最盛期には北上川一帯を治めるほどにまでなったらしい。車中で父からこの話を聞かされ、ぼんやりとしていた祖先の輪郭が徐々に浮かび上がってくるように感じられた。

高速道路を降りると、車窓の風景は住宅街から田園へと移り変わっていった。初めて目にする土地だというのに、なぜか見慣れた風景であるように思えてならなかった。ここが祖先の暮らしてきた土地なのだ、という感激がそうさせたのかもしれないが、かつて自分は確かにこの風景を見ていた、そこへ今「帰って来たのだ」という一種の確信が、私の中で芽生えていった。

本家で出迎えてくれたのは祖母の甥、父にとっては従兄に当たる人だった。父が幼い頃、夏休みに帰省すると一緒によく遊んでもらっていたそうで、すぐに打ち解けた雰囲気になった。父の口調は、普段聞き慣れた標準語ではなく、すっかり岩手弁に戻っていた。幼少期の父の姿がふっと目に浮かんだ。

テーブルを囲んで談笑していると、中央に白い鍋が出された。中のカラメル色を見るやいなや、祖母が歓声を上げた。

「雇月っていうこの地方の蒸し菓子だよ。おいしいから馨君も食べてみなさい。」そう勧められ、湯気の立ったふっくらと柔らかな一切れを口に運ぶと、やさしい甘みがゆっくりと広がっていった。

今は遠く離れた西日本に暮らす祖母の帰郷は数年ぶりであり、感激もひとしおだったのだろう、好物の雇月を頬張る祖母の目は、何と幸せそうに輝いていたことか。

やがてご主人が、私を奥の長い廊下の方へ案内してくれた。壁に、当時の私の背丈の三倍はあろうかという長い槍が掛けてあった。

「代々家に伝わる三間槍だよ。」そう言って彼は私にそれを持たせてくれた。木製の長い柄が薄暗い照明に反射して黒々と輝いた。

槍はずっしりと重かった。それは物理的な重さばかりではなかった。三百年の連綿たる歴史が私と祖先との間を繋いでいる、その感慨が槍を一層重くさせたのに違いなかった。

何軒か親戚の家を巡り、最後に墓地を訪ねた。ごつごつと角張った墓石に刻まれた一族の名や生没年を辿っていくうちに、彼らがこの世に実際に生き、死んでいったことをまざまざと実感させられた。そして、それは当たり前のことであるはずなのに、なぜかとても満ち足りた心持になった。

ふと我に返った。父が砂浜から少し離れたところで東日本大震災の慰霊塔の鐘を鳴らしたのであった。そうか、父は祖父に会いに来ていたのだと気が付いた。津波で家を失い、失意のうちに亡くなった祖父に。

一方、母は波打ち際をゆっくりと歩いていく。対岸の山を眺めながら、誰かに想いを馳せているようだった。

語り合うほど親しい死者がいない私は、しゃがみ込んで湖の底をじっと眺めた。ぽかりぽかりと噴き出るガスの泡が輝きながら浮かび上がっては消え、青天を切り取ったような湖面に水紋を作っていた。それは生命の誕生と死を思わせた。人が生まれて死んで還っていく、その循環の構図を湖に見た。

先祖から託された系の一端を、今私は担っている。そうだ、その意識が、私にあの安堵をもたらしたのだ。過去と現在の間の縦の繋がりの中に私は確かに存在しているのだ。湖面に映る太陽は、やや西へ傾きつつあった。